

# ライフワーク「音楽と民話で世界をつなぐ」

## 音楽を通して社会活動

在英22年、現在は豊かな自然に囲まれたロンドン郊外に住む平井元喜、ピアニストとして、さらには芸術監督としてカーネギーホールをはじめ、世界各地でコンサート活動を展開。演奏を行なった国は60カ国におよぶ。今季も月来のロンドン・カドガンホール公演を皮切りに、ヨーロッパ、北米、東アフリカ、フィリピンなど20カ国あまりを訪れる予定という。

平井の活動で特に目を惹くのは、海外公演の際に現地の人々との文化交流にも積極的に取り組んできたことだ。「音楽と民話で世界をつなぐ」というプロジェクトはそうした中で発展してきた彼のライフワークである。

「最初はデンマークで、日本の絵本を音楽と朗読と映像で紹介する企画として始まったのですが、そのうち訪問国の民話や童話、文学も含むことで取り上げるようになりました。民話や童話にはその国独自の道徳観や文化、風土が表れますが、音楽には人々の心に直接訴えかける力があり、そうした感性の融合によって、お互いの文化への理解が深まればと思っています」

11月に東京・浜離宮朝日ホールで行うライオンでは、同プロジェクトのために平井が作曲した音楽をまとめた組曲（伝説の詩）が日本初演される。「その時々に応じて編成は弦楽四重奏だったり、フルートや和太鼓が入ったりするのですが、そうした小品を今回、ピアノ・ソロ用にまとめてみました。新たに書き下ろした曲もあります」

プログラムはそのほか、J・S・バッハ「ハ短調パルティータ」とヘートウエンの最晩年の「6つのバガテル」で古典の世界を掘り下げ、後半はロマン派の歌の世界に焦点を当てる。

なお、公演の収益は英国の王立マースデン病院のがん基金に寄付される。「世界の小児がん患者を支援するチャリティ活動は2014年より続けており、病院で演奏したり、自分のコンサートに患者さんやご家族を招いたりしてきました。音楽を通じて社会を変え、人々がより幸せになれるよう活動することは音楽家、芸術家としての使命だと思いますので、演奏活動と並行して今後も続けていきたいです」